

町長の一言



広葉樹林に目を向けよう

杉花粉の飛散する季節になってきました。私には特に花粉症ではありませんが、昭和20年代から30年代にかけて、戦後の植樹事業奨励の方策により、50年、100年後の美林を夢見て杉の植樹に励んだので、杉花粉の時期は、責任の一端を感じて、いささか気の引ける季節でもあります。

これは国有林でも同じで、杉、桧が山の峰近くまで植林され、下草の生えない趣のない山林風景になっていきます。

私の家から見るところに、全山、杉と桧の国有林があります。これは、明治時代に植樹した杉を、昭和40年代に伐採して、山の中腹以上は広葉樹林であったものも伐採して、全山植樹したものです。私の子どもの頃は、

この山には、大人2人で抱えるような栗や榎の原木が何十本も生えていて、栗拾いなどにも行つた記憶がありますが、今はすべて伐採されてしまいました。私は親から、山林を皆伐するときでも、代違いの木は残すという不文律があるのだと言われてきましたので、残念な思いで見えています。

広葉樹林が少なくなつて猪や山の動物の餌場を奪つてきたことが、猪等の農産物の被害拡大になつてきた一因であるという事も反省しなければならぬと思ひます。

私は、林野庁等は率先して、木材価格低迷の中の採算制より、環境を守るという視点を明確に打ち出して、広葉樹林を育成保護する方向に取り組んでほしいと思つていきます。

この内容は、町ホームページの「町長の部屋」の中でも掲載しています。ぜひご覧ください。

文芸しるさと

俳句

賑やかに降りて静かに雪積もる
飯 田 勇 一

枝打つや差し出す寒の焼みかん
一 木 雄一郎

寄せ植えの南天の赤春待てり
山 崎 正 行

雪晴や顔出してゐる葱の青
飯 村 愛 子

白襟を映すに小さき春鏡
竹 内 幸 子

はなびらの厚き臘梅活けにけり
飯 村 昭 子

過去のごと白黒の街雪深し
田 所 厚 子

凍瀧の鎧のごとく岩覆ふ
高 橋 芦 江

冬晴の広き公園鳥の声
和 田 範 子

煮大根の琥珀色なり雪降り
鯉 淵 寿美恵

新しき表札となり梅香る
仲 田 まちゑ

雪野原黒一点の烏かな
いそべ きよ

書初の香匂ひある朝餉
仲 田 こう

福寿草子の数の殖え輝けり
阿久津 あい子

躊躇の水のちぢれて寒四郎
今 瀬 多代美

春の滄白亜紀の岩黒光り
瀬 谷 博 子

青空や積りし雪の眩しけり
岩 下 通 子

短歌

農に生くる喜び胸に永らへり
年々の収穫に命賭くれは
宮 本 ふみ江

冷ゆる夜の萎へしころを潤さむ
居間に凜と咲く胡蝶蘭の花
所 美恵子

老いて尚氣力を持ちて「好奇心」
「おしゃれ」のままに同胞と過さむ
山 形 式 妙

子や孫の集い来りて久々に笑
ひささめくこれも法事か
藤 原 千 代

朝窓の景を眺めて幾星霜ゆう
べ沈みし陽はまた昇る
青 柳 京 子

古い姑に離りて住めば看りある
今をしみじみと身に近く思ふ
渡 辺 千紗子

「お騒がせします」と上空の熱気
球より女の声す手を振りながら
秋 山 愛 子

凍てつける土は農具を受けつ
けず野菜畑に悪戦苦闘す
大 森 久 子

力なき老の作れる大根は逞し
き半身を地上にするす
佐 川 あ や

部屋に来ておやすみなさいと最
敬礼する孫は五歳海組み園児
杉 山 みちこ

福寿草金色に咲きはこる今日
の寒さもどく吹く風と
市 川 義 子

大洗の海に行きて眺むれば
波おだやか心もおだやか
岩 下 美知野

三寒の後の四温をまちわびる
庭の木々に春見つけたら
山 口 栄

川柳

初春の朝おだやかに霜どけの
樋落つ音のかすかに聞ゆ
阿良山 ウメノ

研ぎに研げる母の包丁光りい
き今はさびたる菜切り包丁
薄 井 ひ ろ

「今年こそ」も「去年の反省」も失せ
聞く除夜の鐘の音ただ静かなり
枝 不美

秋ならず冬ならぬけふの
山羊雲動くともなき動き長閑けし
片 見 和 枝

ふんわりと靴沈みゆく大樹の下
古りたる落ち葉が土に変わる
川 上 千代子

初釜の席にいたたく一服の清
しき香り麩り来る朝
島 愛 子

記録的な積雪続く「越」の国になほ
も積む「自衛隊はよ出勤せんか」
多 田 志保子

年賀状を夫と分ちて読みて
ゆく歳旦今年も余生樂しまむ
坪 井 きよ子

生ゴミを埋めんとすれば凍て
つける土はスラップを跳ね返し来る
萩 谷 登喜子

薄氷りに水鳥親仔がけころんだ
餌を追いかけて春待たんが佗し
和 知 美智子

紅葉燃えたる秋山郷は四メートル
の雪に埋もれり今日も雪とふ
富 田 佐智子

安全の偽装見抜けず新築す
山 本 隆 莊

